播磨の古代寺院と造寺・知識集団 ３５

播磨の法隆寺式軒平瓦について

寺 岡 洋

前号は「播磨の新羅系及び傍流の軒丸瓦」を取上げました。今号は法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦を紹介しますが、まず、お粗末なお詫びと訂正です。

「（飛鳥寺は）百済聖明王が派遣した技術者集団の指導により崇峻元年（５５８）に着工され、…」というのはひどい間違いで、崇峻元年は５８８年であり、聖明王（聖王 在位５２３～５５４）ではなく、威徳王（武王・余昌 在位５５４～５９８）が派遣したミッションになる。６１０年前後にはほぼ完成したようなので、建立に要した年月は約２０年である。

今回は山崎信二氏の論文の紹介になる［山崎２００８］。なぜこの論文なのか、「論文要旨」を引用する。山崎氏は、２００３年から奈良文化財研究所（奈文研）の古代瓦研究会代表をされていた。

ⅰ）日本の７世紀代の瓦は百済との関係が強いが、とりわけ法隆寺の瓦において百済人との関係が強いことが指摘できること。

ⅱ）７世紀中葉の百済王子の日本渡来によって、百済大寺の造営が進められ、百済からの旧来の渡来人で、倭漢氏の支族であった人々が、百済王族をとり囲む形で集住しはじめること。

ⅲ）百済滅亡後において、百済王子を難波に配して日本国内における百済国の王としたが、これは法隆寺と密接な関係があること。

ⅳ）法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦を分類し編年すると、これらの瓦を出土するほとんどすべてにおいて百済人との関係が指摘できることである。

ⅴ）以下、新羅、高句麗との関係を取上げられるが、播磨とは直接関連しないので略す。

山崎論文では、播磨に関して、新部大寺廃寺（賀毛郡・小野市）、下太田廃寺（揖保郡・姫路市）、繁昌廃寺（賀毛郡・加西市）、吸谷廃寺（賀毛郡・加西市）の４ヶ寺が取上げられている。摂津になるがご近所の芦屋廃寺（芦屋市）、播磨と関係ある細工谷遺跡（大阪市）、太田廃寺（茨木市）もあわせて紹介する。

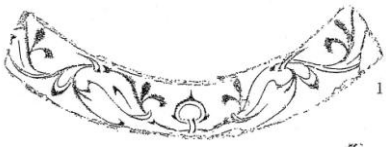
法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦の特徴

① 全体の文様としては、中央の宝珠形の中心飾りの左右に忍冬唐草文をだいたい３回反転させたもの。

② 中心飾りとしては、中央に外廓が宝珠形の中心飾りをつけ、中心飾りの内廓は丸いもの（Ａ）、内廓の外側が丸く内側だけがハート形のもの（Ｂ）、内廓の文様全体がハート形のもの（Ｃ～Ｆ）がある。播磨のものはＡ、芦屋廃寺はＣに該当する。

③ 唐草文の特徴として、唐草文の主葉（茎）は２本線で描き、結節部を作ってそこから枝葉を派生させるものである。……（後略）

この２本の曲線の組み合わせからなる複合曲線こそが、法隆寺式軒平瓦の最大の特徴であり、……法隆寺の軒平瓦においてのみ初期の展開の仕方が追えるのであり、法隆寺の工房とでもいうべき空間で派生した文様なのである。以上、山崎論文の引用です。



法隆寺東院下層 ２１５Ａ↑

法隆寺東院下層は聖徳太子が推古９年（６０１）に造営に着手した斑鳩宮の遺構と重なるようだ。

法隆寺２１５Ａは、法隆寺式軒平瓦の祖型であり、笵型を用いる最初の軒平瓦で、７世紀中頃の年代とされる。

法隆寺西院２１６Ａ ↑

法隆寺西院は今我々が見る法隆寺で、法隆寺２１６Ａは、法隆寺西院伽藍の金堂・塔創建瓦である。瓦が作られた上限年代は６７５年頃と考えられている。

播磨の法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦

■新部大寺廃寺

■下太田廃寺

新部大寺廃寺と下太田廃寺唐草文の第２単位には蕾がある

■繁昌廃寺

繁昌廃寺と吸谷廃寺唐草文には蕾が見られない

■天神山窯跡（繁昌廃寺）

■吸谷廃寺（吸谷窯跡）

■播磨の法隆寺式軒平瓦のネットワーク

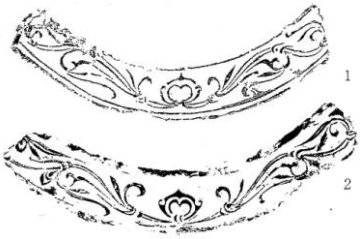
「新部大寺廃寺例は法隆寺２１６Ａの模倣だが、大和の平隆寺例や山村廃寺例に較べ、模倣の仕方がよくない。下太田廃寺例は新部大寺廃寺例の模倣であり、蕾の形骸化、結節部の形骸化など、かなり年代の降るものと考えてよい。讃岐仲村廃寺例……。なお、繁昌・吸谷廃寺例は蕾を持たないが、新部大寺例の模倣であろう」［山崎２００８］。瓦の年代については、６７５～７００年頃と想定されている。

播磨ではまず加古川本流域の新部大寺廃寺に法隆寺２１６Ａ系の軒平瓦が伝えられ、次いで大津茂川流域の下太田廃寺と加古川流域の繁昌廃寺・吸谷廃寺で使われている。瓦の動きは人の動きでもある。

摂津の法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦

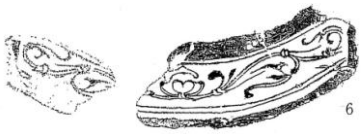
■法輪寺２１６Ｄ（法隆寺２１６Ｂの祖型）

法輪寺は法隆寺東院の北方に位置し、三井寺（みいでら）とも呼ばれる。
上図：２１６Ｂ
下図：２１６Ｄ



■芦屋廃寺

■細工谷瓦窯（百済尼寺）



細工谷遺跡は鶴橋駅の西南約５００m、上町台地の東端に位置する。「百済尼寺」を裏付ける墨書土器が多く出土した。

■太田廃寺

■摂津の法隆寺式軒平瓦の特徴

摂津の法隆寺式軒平瓦は、播磨とは中心飾りのデザインがわずかに異なる。内廓の文様全体がハート形で、遊線がないグループ（Ｃ）に芦屋廃寺と細工谷瓦窯例、内廓右側のみに遊線があるグループ（Ｄ）に摂津・太田廃寺が分類される。

Ｃグループの祖型は法輪寺２１６Ｄで、「芦屋廃寺例は、必ずしも法輪寺例の直接の模倣とは言えないが、文様自体はかなりしっかりしていると言ってよい。細工谷瓦窯例は唐草文第２単位に蕾がないので、法隆寺２１６Ｂを模倣したものと考えられる」。

Ｄグループは、法隆寺２１６Ｃと太田廃寺例の２例のみ。「法隆寺２１６Ｃは、西院伽藍の創建期の瓦であるが、組み合う軒丸瓦は法隆寺３７Ｂで、文様が平坦なことからみて、どんなに遡っても天武朝であろう。太田廃寺軒平瓦は、きわめて稚拙な文様である。しかし、法隆寺３７Ｂと太田廃寺軒丸瓦とが同笵で、組み合う軒平瓦の中心飾りに右側のみ遊線のあるのは、法隆寺２１６Ｃと太田廃寺例との２例しか日本では存在しないことは注目してよい」［山崎］。

法隆寺軒瓦がなぜ百済と関係があるのか

このテーマが今回の主題である。「法隆寺の創建と再建時の造営主体については必ずしも明らかでない。創建については、聖徳太子による造営と、太子追善のための造営との説があり、再建についてはさらに不明な点が多い」［山崎］。

私は、再建法隆寺は「智識寺」としての側面を強く持っていたのではないかと考えている。それは、法隆寺金堂の釈迦三尊像光背（こうはい）銘、法隆寺・観世音菩薩造像記、法隆寺命過幡（めいかばん）などの資料から、大原博士（史）・山部連（やまべのむらじ）・飽波評君（あくなみのこほりのきみ）・大窪史など、斑鳩周辺に本拠を置き上宮王家と関係があった氏族が法隆寺の法会に関わっており、造立にも関与したのではないかと考えられるからである。その際、知識結集の看板に聖徳太子が存在するのは至極当然なことであろう。

山崎氏は文字資料と瓦を対比させる。

Ａ．癸未年（推古３１年：６２３）銘の釈迦三尊像に司馬鞍首止利仏師が造ることを記す。

Ｂ．法隆寺金堂の広目天光背には、「山口大口費」が記され、書紀の白雉元年（６５０）の「漢山口直大口」に対応する。

Ｃ．法隆寺の銅板造像記に、「甲午年…、鵤大寺徳聡法師、片岡王寺の令弁法師、飛鳥寺の弁聡法師ら

三僧、…族は大原博士、百済に在りては王、此の土にては王姓」と記す。甲午年は持統八年（６９４）とされ、鵤大寺（いかるがおおでら）は法隆寺。

Ａの年代に近いもの：

法隆寺の手彫り忍冬唐草文軒平瓦。手彫りの忍冬唐草文軒平瓦は坂田寺と法隆寺しかない（＊時代が下るが、播磨揖保郡の奥村廃寺には手彫り忍冬文軒平瓦がある）。坂田寺は倭漢（やまとのあや）氏支族である鞍作村主（くらつくりのすぐり）の氏寺である。

Ｂの年代に近いもの：

法隆寺の型押し忍冬唐草文軒平瓦。百済大寺と考えられる吉備池廃寺では法隆寺２１３Ｂの型押しを用いて軒平瓦を製作する。百済大寺（吉備池廃寺）の大匠（おおだくみ：造営長官）は、倭漢氏の書直（ふみのあたひ）縣（舒明紀１１年：６３９）であった。

百済大寺は、１月１６日の新聞に大きく報道された「飛鳥 未知の大古墳か」の被葬者に挙げられている舒明天皇（在位：６２９～６４１）発願の寺である。

Ｃの年代に近く、法隆寺再建当初のもの：

法隆寺西院創建軒丸瓦は３７Ａ‐２１６Ａの組み合わせが金堂所用瓦であり、２１６Ａは摂津・堂ヶ芝廃寺例と同笵であろう。堂ヶ芝廃寺は摂津百済寺と想定され、細工谷を挟んで「百済尼寺」と向かい合う。

この僧寺・尼寺の造営氏族は、「百済王善光王等を以て、難波に居らしむ」（天智紀３年：６６４）からみて、百済王善光王と考えられる。

銅板造像記に記す大原博士は百済王氏の一族と考えられ、「法隆寺西院創建軒平瓦２１６Ａは、百済王族との関係が濃厚であるとみてよいのではないだろうか」とされた［山崎］。

結論として、Ａ・Ｂの時期には、法隆寺の軒平瓦は倭漢氏一族の鞍作氏・山口直氏及び蘇我本宗家と密接な関係があり、Ｃの時期には百済王族と密接な関係があることになる。

そして、百済大寺の造営に伴い、「百済からの旧来の渡来人で、倭漢氏の支族であった人々は、百済王族を取り囲む形で集住しはじめる。その最も大きな核は百済大寺であろうが、他の一つ核が法隆寺であり、別の一つは摂津であろう（６５０年頃は四天王寺が核ではなかろうか）。」という仮説を提示された。

播磨と百済・百済人の関係はどうか

新部大寺廃寺・繁昌廃寺・吸谷廃寺

大和・摂津・近江等については百済・百済人との関連をうかがえる史料が残るが、播磨賀毛郡の３ヶ寺については史料を欠く。法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦は存在するが、ネットワークを裏付けるのが困難で、他地域の類例から賀毛郡にも百済・百済人との関連を類推できる、という状況であろうか。

法隆寺の所領の集積には山部連・山直が深く関わっており［菱田２００６］、山部連・山直と百済・百済人との関係が考えられるのではないだろうか。

■百済王氏と播磨

細工谷遺跡から出土した木簡に

・「播磨国□郡□□」

・「里秦人□田万□□一石」

がある。貢進物付札で、年代は国郡里制下の大宝元年～霊亀元年（７０１～７１５）になる。郡名は「竹」とも「加」とも読めるが不明。竹なら多可郡、加なら賀古郡・賀毛郡が考えられる。秦人は賀茂郡山田郷の資料がある。

一石の貢進単位は、封戸（ふこ 高級貴族の給与として供せられた戸）の可能性があり、百済王氏の経済的基盤が播磨にも存在したことになる。

細工谷遺跡からは、漢人（あやひと）集団が経営した播磨峰相山（みねあいさん）窯跡群の打越瓦窯系の蓮華文帯鴟尾（しび）が出土している。「四天王寺Ｅの笵型ｂと同笵の可能性が高い」と報告されている。

■柞巨智賀那（ならのこちの・かな）と辻井廃寺

ずばり百済人もいる。欽明紀元年（５３２）条には「百済人己知部（こちふ）投化（おのづからもう）けり」と記す。己知部は、風土記・餝磨郡巨智里に、「韓人（からひと）山村等が上祖（とほつおや）、柞巨智賀那、此の地を請ひて田を懇りし時、…」とあり、巨智里の里名にもなる餝磨郡の有力豪族である。巨智里には辻井廃寺、今宿遺跡（寺院址）が所在する。法隆寺式軒平瓦の小片が１点図化されている［竹原・津川２００５］。

■呉勝（くれのすぐり）と下太田廃寺

風土記・揖保郡大田里の名称の由縁は、「大田と称う所以は、昔、呉勝、韓国（からくに）より度（わた）り来て、始め、紀伊の国名草の郡の大田の村に到りき。その後、分かれ来て、摂津の国三嶋の賀美の郡の大田の村に移り到りき。其が又、揖保の郡の大田の村に遷り来けり。是は、本（もと）の紀伊の国の大田を以ちて名を為すなり」とある。

摂津太田廃寺は法隆寺軒平瓦２１６Ｃと同笵の瓦を出土し、下太田廃寺には軒丸瓦・軒平瓦とも法隆寺式の軒瓦がある。呉の字の付く人名の出自は、百済・加羅諸国等の韓南部諸国に限定されるそうだ。

■葦屋漢人と芦屋廃寺　■野口廃寺　■中井廃寺

法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦が出土しており、機会があれば紹介したい。

＊引用・参考文献はむくげの会ＨＰを参照して下さい

■城牟礼山（きむれやま）と百済人

風土記・神前郡多駝（ただ）里条には、城牟礼山について、「又、城牟礼山といふ。あるひといへらく、城（き）を掘りし處は、……。参度（まひ）り来し百済人等、有俗（ならひ）の随（まにま）に城を造りて居りき。其の孫等（このすえ）は、川辺の里の三家（みやけ）の人、夜代（やしろ）等なり」と記す。

百済人等が移住先でも故国でやっていたように「山城」を造ったという稀有の記述である。「城」を「キ」と訓むのは百済語で、紀では「サシ」と訓む。牟礼（ムレ）も朝鮮古語で「山」の意とされる。

多駝里には新次社(にいすきのやしろ)が祀られており、「次（スキ)」は白村江（ハクスキのエ）の「村（スキ)」と同義で、新次は新しく開拓した村の意になる。「市川の上流から中流にかけての神前郡一帯に百済系渡来人の文化圏」が形成されていた、との指摘もある［長田１９８９］。吸谷廃寺は多駝里の東隣に位置する。

藤原京域になる雷丘北方遺跡（高市郡明日香村）で出土した木簡には、「神前評川辺里　三宅人荒人」があり、風土記の記事の「三家人」を裏付けている。

■引用・参考文献

山崎信二　１９８３「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」
『文化財論叢』奈良国立文化財研究所

山崎信二　２００８「七世紀後半の瓦からみた朝鮮三国と日本との関係」『日韓文化財論集Ⅰ』
奈良文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所

竹原伸仁・津川千恵　２００５「播磨の法隆寺式軒瓦」
『飛鳥白鳳の瓦づくり Ⅷ』奈良文化財研究所

橿原考古学研究所付属博物館　２００１
『聖徳太子の遺跡―斑鳩宮造営千四百年―』

橿原考古学研究所付属博物館　２０１１『仏教伝来』

寺岡　洋　２００９「「知識」、知識集団の実態を日本・古代朝鮮にみる」『むくげ通信』２３４　むくげの会

高井悌三郎・堀江良弘　１９７２『播磨大寺遺跡Ⅰ　昭和４６年度発掘調査報告』小野市教育委員会

井内功・井内潔　１９９０「新部大寺廃寺、吸谷窯跡」
『東播磨古代瓦聚成』井内古文化研究室

大谷輝彦　２００３「餝磨、神前、揖保郡東部の古代寺院」
『古代寺院からみた播磨』第３回播磨考古学研究集会

鎌谷木三次　１９４２「下太田廃寺」
『播磨上代寺院趾の研究』成武堂

武藤　誠　１９７７「下太田廃寺跡」『兵庫県の古社寺と遺跡』武藤誠先生古稀記念会　初出１９３６年

加西市教育委員会・甲陽史学会・六甲山麓遺跡調査会
１９８７『播磨繁昌廃寺―寺跡と古窯跡―』

芦屋市教育委員会　１９７０『芦屋廃寺址』

大阪市文化財協会　１９９９『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』

「朝日新聞」他　２０１５.１.１６付

藤沢一夫　１９６９「摂津国百済寺考」
『日本のなかの朝鮮文化』２　朝鮮文化社

積山　洋　２００８「難波京と百済王氏」
『奈良女子大２１世紀ＣＯＥプログラム報告集』１９

菱田哲郎　２００６「東播磨の古代寺院と氏族伝承」
『喜谷美宣先生古稀記念論集』

長田夏樹　１９８９「風土記、朝鮮語起源地名考
―百済語スキ・新羅語ツキについて―」
『歴史と神戸』１５３　神戸史学会

奈良国立文化財研究所「木簡データベース」
＊評（こほり・こおり）は郡の先行組織（評→郡）

李永植　１９９０「古代人名からみた「呉」」
『日本歴史』第５０２号　日本歴史学会